

洪沢栄一と平三郎の関係

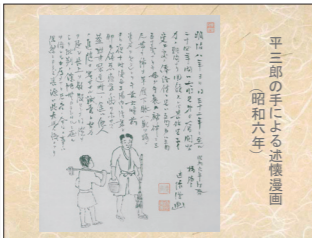
- 川越藩の剣術指南役となった祖父平兵衛は、洪沢家の血洗島村へよく出稽古に出掛けて、近郷の人々に剣術の指南をしていた。
- 弟子には洪沢栄一、従兄弟の喜作、尾高博忠、弟の長七郎、平九郎たちがいた。
- これが縁となり、栄一の学問の師である尾高博忠の妹のみちが、平兵衛の跡継ぎである修三と結婚し、平三郎が次男として生まれる。
- また、みちの妹千代は栄一の妻となったので、栄一と平三郎は叔父甥の関係になった。

書生時代

明治4年 廃藩置県により、父修三は禄を失う。
明治5年 平三郎は単身上京し、洪沢家の書生となり、壬申義塾、大学南校で学ぶ。
明治7年 大川家も上京するが、生活はますます厳しくなり、母が妹である洪沢夫人に度々借金を重ねる。
明治8年 家族のために学業を断念し、就職を決意する。

王子製紙時代

明治 8年 抄紙会社(後の王子製紙)に入社(因引工 月給5円)
明治12年 金社再建案の建白書を提出し、抄紙技術習得のため、單身渡米
明治15年 稲わらを原料とした洋紙の大量生産に成功
明治23年 日本で最初の木材ハルプの製造に成功
明治26年 専務取締役就任
明治31年 洪沢栄一とともに王子製紙を退社
昭和 8年 王子製紙、富士製紙、樺太工業の三大製紙会社が合併(平三郎は相談役)

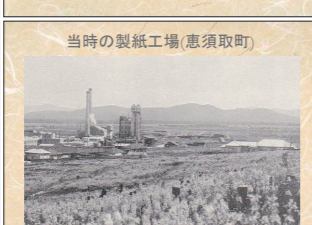
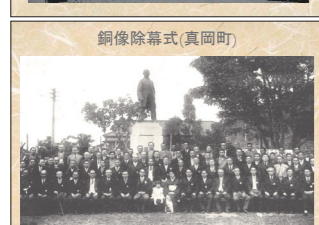
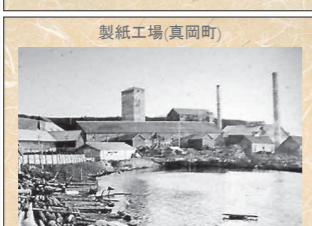
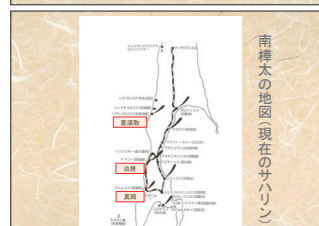


主な実業界での活躍

明治14年 浅野セメントを創立し、副社長に就任
明治34年 上海華章造紙会社の総監督に就任
明治36年 九州製紙を創立し、社長に就任
明治39年 中央製紙を創立し、社長に就任
明治43年 東洋汽船副社長に就任
大正 3年 樺太工業を創立し、社長に就任
大正 8年 富士製紙社長に就任
大正 9年 武州銀行頭取に就任
大正10年 日本鋼管社長に就任
*80有余に及ぶ多くの事業に力を注いだ。

樺太(サハリン)時代の活躍

- 大正3年樺太工業を創立し、泊居町・真岡町・恵須取町に次々と製紙工場、ハルプ工場を建設する。
- 昭和9年、泊居町・真岡町では町の発展に尽力した平三郎の銅像が建てられた。
- 同年、恵須取町では、町の発展に貢献した平三郎を称えた頌徳碑が建立された。
- 平成4年頌徳碑は、桜影会のご尽力により坂戸市に移設される。



郷土三芳野村への主な貢献

明治41年 耕地整理事業に基本金3千円を寄付
大正 4年 原次郎の要請を受け、村青年団の顧問となる
大正 6年 消防ポンプを村に寄付
大正 8年 三芳野小の校庭拡張を支援
大正11年 三芳野村信用購買販売組合の理事長に就任

大正13年 農家の副業として蠶織を勧め、奨励金300円を寄付
大正14年 私財を投じて越辺川に堤防を築く
大正15年 霞堤増強修築改修工事完成
3千円の基本金を寄付
昭和 2年 三芳野小校庭に大川翁彰功碑が建立される
昭和 5年 天狗の鼻河川改修工事完成
工事費の半額1万4千円を寄付
昭和12年 三芳野小学校増築改修工事完成
工事費の半額1万3千円を寄付

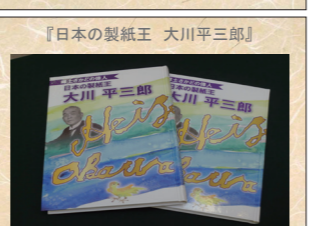
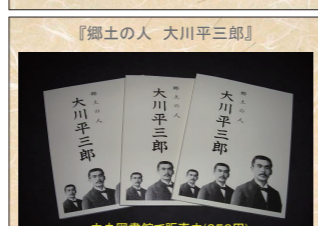


大川育英会の設立

- 郷土埼玉出身の若者のために50万円を寄付して、大正14年に大川育英会を設立。
- 500名近い優秀な人材を育成し、その多くが実業界や政界等で活躍された。元埼玉県知事の畑和氏もその一人である。
- 大川育英会の奨学生で組織された桜影会が、昭和43年に大平奨学会と改名し、育英事業を再開した。現在の理事長が池田光男氏である。

社会事業への貢献

- 昭和12年 平三郎の遺志により100万円が当時の内務省に寄附され、(財)社会事業会館が設立される。
- 昭和45年 同会館は(社)全国社会福祉協議会と合併する。
- 昭和62年 新霞ヶ関ビル完成に合わせ、平三郎の功績を称えた胸像が(社)全国社会福祉協議会ホールロビーに設置された。



Rotary 東京池袋豊島東ロータリークラブ

3002回 第26回例会 2023.3/16

Rotary Club of Tokyo Ikebukuro Toshima-East

Weekly Report

会長:小泉博明 幹事:石川宜司 RI会長:ジェニファー-E.ジョーンズ 第2580地区ガバナー:嶋村文男

RI2022-2023年度テーマ

四つのテスト

言行はこれに照らしてから

- 1・真実か どうか
- 2・みんなに公平か
- 3・好意と友情を深めるか
- 4・みんなのためになるか どうか

イマジンロータリー

箴語

名利共休(みょうりとともにきゅうす)

名誉もお金も追い求めないということです。千利休という名前は、この言葉が由来になっています。この二つは、とても魔力があり、欲しくてたまらないものかもしれません。それを求めないということです。奉仕活動を行い、名誉を求めると慎まなければなりません。

本日の例会

3月16日(木) 12:30~13:30

卓話:「CBD(カンナビジオール)の現状と治療の実例(300)」

卓話者:曾根 正登氏

次回の例会

4月6日(木) 12:30~13:30

エッピングデー

3月9日 例会報告

司会 山本会員
開会点鐘 小泉会長
嬉しいひな祭り・ロータリーソング
ソングリーダー 廣内会員

☆会員総数 37名
☆出席規定適用者数 28名
★本日の出席者総数 24名
★" 免除者出席数 5名
★本日の出席率 72.72%

☆本日のゲスト
横手 忠氏(卓話者)
池田 光男氏(大平奨学会理事長/元東京池袋RC会員)



3/9 例会

ニコニコ

池田君 (元東京池袋RC会員)

本日大川平三郎氏の話をしていただき、ありがとうございます。

渡邊君 お誕生日のお祝い誠に有難うございました。

横山君 お誕生日プレゼントありがとう。私もやっとな草も酒も女も知るようにになりました。

本日の合計額：20,000円

今年度ニコニコ累計額：553,725円

会長報告

第25回 (2023.3.9)

中国に明末の儒者であるこう洪じせい自誠が著した『菜根譚』という書がある。明末は儒教道徳が形骸化し、政治家や官僚が腐敗した時代であった。そのような世相を背景に、儒教の思想を基に、老荘思想や禅宗の説などを交えて書かれた処世訓である。

題名にある「菜根」とは「人はよく菜根を噛みえば、すなわち百事をなすべし」という故事に由来する。人は堅い菜根を噛みしめるように、逆境に耐えることができれば、多くのことを成し遂げるという意味である。まさに生きるヒントを与えてくれる書物である。

例えば「苦心のうち中、常に心を悦ばしむるの趣を得、得意の時、すなわち便ち失意の悲しみを生ず」(角川文庫)と言う。あれこれ苦心している中に、とかく心を喜ばせるような面白さがあり、逆に、自分の思い通りになっているときに、すでに失意の悲しみが生じている。心して噛みしめるべき名言である。

幹事報告

1. 5/15の合同例会の事前案内のご連絡

カルタ書道展報告②

2月中旬に開催されたこどもカルタ書道展には

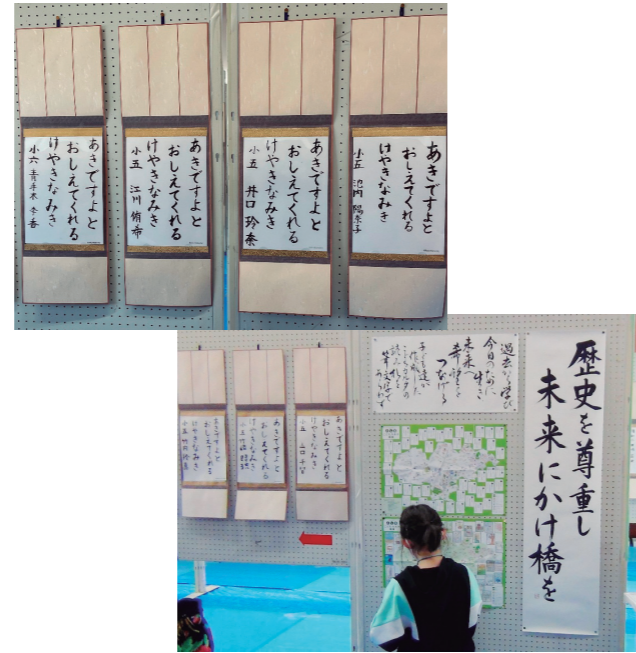
1100点の書道作品が集り、展示会中には580名のご来場がありました。このイベントで多くの小学生とご父兄の間で『としまこどもカルタ』が知られたことは大変嬉しいカルタの復活でした。

書道展の主催者である金子良恵先生から書道の展示写真が届きました、また当クラブからは参加賞として応募してくれた小学生全員に書道展とクラブ名を印刷したクリアファイルを贈りました。費用は合計29,150円です。

開催中には、こどもカルタの作成に大変お世話になりました前教育長の三田様にご来場して書道作品を感心してご覧になっていました。

このカルタ展の開催は現在当クラブが進行中の『としまこどもカルタ』デジタル化がより小学生に認識を広めてくれたと感謝したいと思います。

記 長尾社会奉仕委員長



主催者の金子良恵様と元豊島区教育長三田様

3月9日 卓話報告

渋沢栄一の高弟 製紙王 大川平三郎



大川平三郎は、1860年(万延元)10月25日、川越藩横沼村(後の三芳野村・現在の坂戸市)で、川越藩士大川修三の次男として生まれた。

1872年(明治5)、平三郎は叔父の渋沢栄一を頼って上京し、書生となり壬申義塾や大学南校で勉学に励んだ。しかし、明治4年の廃藩置県により、父修三は藩士としての職を失い、大川家は貧乏のどん底に陥っていた。母みちが妹

である渋沢夫人に度々借金する姿を見るに見かね、平三郎はついに学校を辞め、就職を決意する。

1875年(明治8)渋沢の世話で王子にあった抄紙会社(後の王子製紙 現・王子ホールディングス株)に入社する。朝6時には出勤し、夜10時頃まで工場で働き、製紙技術を習得するとともにその原理を知るために英語版の窮理学(現在の物理学)を手に入れ、知識をも身につけていった。しかし、会社の業績は芳しくないため、平三郎は、会社を発展させるには外国で新しい製紙技術を学ぶ必要から会社に建白書を提出する。これが会社に認められ1879年(明治12)、20歳の時会社の命令でアメリカに派遣された。

帰国後、学んできた成果を活かし、これまでの製紙原料のボロ布から稲わらに替えて、新しい製紙の大量生産に成功する。1884年(明治17)にはヨーロッパに渡り、木材パルプ製造の方法を研究して、日本で初めて木材によるパルプ製造に成功するなど製紙技術の向上に多大な貢献をした。1890年(明治23年)には渋沢に高い能力が認められ、四女照子と結婚し、3年後には王子製紙の専務取締役役に就任した。

1898年(明治31)、王子製紙を退社した後も、同社で培った知識・技術に加え、類まれな奮闘努力により九州製紙を始め中央製紙、樺太工業など次々と製紙会社を創業する。さらに、製紙業を母体としてセメント・化学・電力・製鋼・金融等々、実に80有余に及ぶ多くの事業に力を注ぎ、実業界において目覚ましい活躍をした。特に製紙業界では製紙王と呼ばれ、その名を後世に残した。

実業家として成功した平三郎は、渋沢の「論語とそろばん」の精神を引き継ぎ、社会のために様々な支援を行った。当時、水害等で貧しかった三芳野村のために小畔川(越辺川の支流)に堤防を築くとともに産業の振興や三芳野小学校の増新築・校庭の拡張等に多額の援助をするなど、同村の発展に多大な貢献をした。さらに県内の貧しい若者のために大川育英会を設立し、多くの優秀な人材を育成する。戦後、これを引き継いだのが大平奨学会であり、現在の理事長が池田光男氏である。

一職工から大実業家になった平三郎であったが、1936年(昭和11)12月30日惜しまれながらその生涯を閉じた。享年77歳であった。